チョムスキー 9.11
Power and Terror

誰だってテロをやめさせたいと思っている。
簡単なことです。
参加するのをやめればいい。

監督＝ジャン・ユンカーマン

撮影＝大津幸四郎　整音＝弦巻裕　編集＝ジャン・ユンカーマン、秦岳志
アソシエイト・プロデューサー＝小川真由　企画・製作＝山上徹二郎

音楽＝忌野清志郎

記録映画／35 ミリ・カラー／74 分／2002 年シグロ作品
公式サイト　http://www.cine.co.jp

製作・配給　シグロ
〒164-0001 東京都中野区中野 5-24-16　中野第２コーポ 210
TEL 03-5343-3101　FAX 03-5343-3102　e-mail siglo@cine.co.jp

ユーロスペース にてモーニングショウ公開中！
名古屋・名演小劇場にて公開中！
2 月 15 日より横濱シネマにてモーニング＆レイトショウ公開決定！
ノーム・チョムスキー著『ノーム・チョムスキー』9.11 発売！（監修：鶴見俊輔／発行：リトル・モア）

【イントロダクション】

今年７４歳になるノーム・チョムスキーは、現在もマサチューセッツ工科大学教授として研究を続ける言語学者。言語学の世界に革命をもたらし、京都賞を受賞するなど世界中でその業績が高く評価されている。一方で、ベトナム戦争以来、アメリカの外交政策を批判する活動を一貫して続けており、特に昨年の９月１１日におきた同時多発テロ以降、彼の事実に基づいた鋭い政治評論と発言は、アメリカ内外で高い注目を集めている。

ロックバンド U2 のボーカル、ボーノが「飽くなき反抗者」と呼ぶ反骨の知識人、ノーム・チョムスキー。本作は、アメリカにおけるもっとも重要な「アメリカ批判者」であるチョムスキーの最新のインタヴューとその活動の記録である。

監督は、画家の丸木位里・丸木俊夫妻を描いた『劫火– – ヒロシマからの旅』でアカデミー賞ドキュメンタリー部門にノミネートされたジャン・ユンカーマン。与那国でカジキと闘う８２歳の老漁師を描いた『老人と海』で東京の劇場動員記録を塗り替え、日本庭園についてのドキュメンタリー「夢窓– – 庭との語らい」ではアメリカ・エミー賞を受賞した、ユンカーマン監督の待望の最新作である。

【コメント】

言語のねもとに最低限の道徳があり、それはテロと対立する。チョムスキーからの言いつたえ。
鶴見俊輔（哲学者）

善悪の二元論に席巻されたと思っていたアメリカの深部で闘う知識人チョムスキーの、素敵な好々爺ぶりが可愛い。そこに渦まく聴衆の熱い歓迎ぶりに、一抹の希望が輝いて見える。
佐藤真（映画監督）

チョムスキーの話しぶりはとても優しく穏やかだが、その強烈で力強い内容は私の心を打つ。知性の中の、眠っていた良心が目覚めさせられた。
チョン・テソン（プサン国際映画祭・PPP ディレクター）

ノームが語る政治についてのメッセージと彼の人柄の両方を、この映画は深く完璧にとらえている。偽りのないこの作品に、心から感動した。
キャロル・チョムスキー（教育学者）

【製作にあたって】

● 映画はこうして始まった－－ノーム・チョムスキー氏への最初の手紙より。

私があなたについての映画を作りたいと思い立った一番の動機は、２００１年９月１１日のニューヨーク同時多発テロおよびその後のアメリカ合衆国の一方的な武力行使に関する、あなたの発言に触発されてのことです。
私にとって最もショックだったのは、同時テロそれ自体よりも、その後のアメリカ合衆国のアフガニスタンに対する強権発動と、それに盲従し、なし崩し的に自衛隊を派遣した日本政府の対応、そしてそれらの事態に無批判に支持報道を繰り返した両国の主だったマスメディアの在り方でした。（もっとも、私を含めた日本の市民社会が抱える政治に対する諦念と不感症こそが、最初に問われるべき問題かもしれませんが。）
そんな時、９．１１後に各国マスメディアによって行われた、あなたへのインタビュー記事を読む機会を得ることができました。そこでのあなたの発言を通して、歴史の流れの中に生き生きと位置づけて理解することのできる情報と、それに対するあなたの明晰な分析と主張に触れることができ、私は心から勇気づけられたのでした。
「今私に何ができるだろうか、映画のプロデューサーとして何をなすべきか」ということを考えていた私にとって、答えはひとつでした。あなたに関する記録映画を作りたい、そして私が触発されたあなたの“知識人”としての信念と事にあたる時の態度といったものを、この映画を通して広く伝えたいと思ったのでした。

（2002 年１月 6 日　シグロ・山上徹二郎）

●チョムスキー氏からの返信。

あなたの手紙を、興味深くそして感謝とともに読みました。
私のスケジュールは非常にタイトで、かなり先まで細かく埋まっています。インタヴューをセッティングするのは易しいことではありませんが、可能性をさらに探ってみたいと思っています。大変興味をそそられています。
ところで、新聞や知識人たちによる雑誌に書かれていることは、こちらの世論の内容について非常に間違った印象を与えています。今回のケースでは、この２００年間で初めて合衆国本土が攻撃されたにもかかわらず、戦争反対の声はこれまでで最も高いと言えるでしょう。
私のように話のできる立場の者には現在依頼が殺到しており、本当にそのごくごく一部しか受けることができない状態です。
知識人の意見が対外強硬主義的であることは事実ですが、こういう時は大体において常にそういう場合が多いということを念頭においたほうがいいでしょう。
インドシナにおける戦争ではそのような傾向がより一層強かったし、また世論の反戦意見が頂点に達した時でさえ、知識人の中には道義的な反戦論者－－私の意味するのは、実業家たちのあいだでみられた「戦争は失敗で金がかかり過ぎている」という理由での反戦論者をこえる者のことですが－－は皆無でした。
今現在、知識層の雑誌に書かれていることは、大衆の意見とは無関係なのです。大衆の意見を操作しようという目的があるとき以外は、ということですが。

（2002 年１月 8 日　ノーム・チョムスキー）

【ノーム・チョムスキー　プロフィール】

Noam Chomsky

１９２８年、米国ペンシルベニア州フィラデルフィアに生まれる。ペンシルベニア大学で言語学を専攻。１９５０年代後半以降、生成変形文法理論の成果を次々と発表し、言語学の世界に革命をもたらした。その影響力は隣接諸科学の分野にも及び、哲学、認知科学、心理学、政治学など、広範な学問領域で顕著な業績を上げた。１９８８年、認知科学分野への貢献により京都賞（基礎科学分野）受賞。現在もマサチューセッツ工科大学教授として研究を続ける言語学者。

一方、1965 年に米国が北ベトナムへの爆撃を開始する以前から米国の外交政策に対する批判を開始した。その作業は現在に至るまで続いており、とりわけ２００１年「９月１１日」の同時多発テロ事件以降、中東情勢と米軍のアフガニスタン爆撃に関する発言は世界の大きな注目を集め、インターネット上でもその見解が数多く紹介された。主要な言語学関係著作はもちろん、社会・政治に関する著作も多数あり、近著に『9.11-------アメリカに報復する資格はない！』（文藝春秋社、2001 年）、『アメリカの「人道的」軍事主義---コソボの教訓---』（現代企画室、2002 年）、『「ならず者国家」と新たな戦争』（荒竹出版、2002 年）などがある。

新刊予定は『ノーム・チョムスキー』（リトル・モア、2002 年 9 月）、『チョムスキー、世界を語る』（トランスビュー、2002 年 9 月）他あり。

【監督の言葉】

東京に住む多くの人と同じように、９月 11 日の同時多発テロを、僕は、悲しみと恐れと怒りの入り交じった気持ちで受け止めた。その思いは、テレビ中継が被害者の増加を報じるにしたがって深くなった。しかしそれから数日、数週間とたつうちに、当初の強烈な実感は、いらだたしい距離感と葛藤を始めた。ブッシュ政権が独善的で盲目的な愛国心をもって反応し、抑制のきかない軍事力行使につながるに及んで、そうした感覚はいっそう強まった。

アメリカ人の 95 パーセント、そしてオピニオン・リーダーの 100 パーセントが軍事的な制裁を支持していると聞いて、僕は驚いた。残り５パーセントのうちの一人として、寂しく、むなしい気分だった。僕たちは 15 年にわたるベトナムでの戦いから何も学ばなかったのだろうか。この動きにストップをかけ、軍事力に訴えることがほんとうにテロに対する答えなのだろうかと、疑問を提示する人はいないのか。

まもなく登場したのが、ノーム・チョムスキーの著書『９．１１』だった。この１冊に救われた人間がどれほどいただろう。歴史を知り、恐れずに教訓を引き出そうとする人間がいた。マスメディアや政治システムの助けを借りない、自由の声である。彼の主張は、あらゆる暴力と対峙する。それが強国による軍事介入であろうと、その裏側で「権利を奪われた」と主張する人々による残忍なテロであろうと。

プロデューサーの山上と僕は、彼の主張を伝えるべきだと考えた。そして 2001 年の末、チョムスキーに接触し、２、３か月以内に３回のインタビューを受けてほしいと依頼した。僕たちはそれらのインタビューと、彼の日常生活のいくつかのシーンをつなげて、映画をつくりたいと考えていた。

翌日、チョムスキーから E メールで返事が届いた。映画の企画は支持するが、実現はむずかしいという内容だった。インタビューの時間がとれるとしても、何ヶ月後かに、オフィスで１回だけだろう。しかし、今後数ヶ月の間に何度も講演を行なうことになっているので、それを撮影するのはかまわないという。僕たちは、いくつかの講演を撮影し、長いインタビューを１回行なうことで同意した。しかし、公的な活動風景を撮るだけで「チョムスキーその人」を描き切れるのかどうか心配だった。

やがて僕たちは、それこそが「チョムスキーその人」であることを知った。チョムスキーは語る－－人々に語ることこそが彼の日常生活であり、人生を通じて絶え間なく行なってきたことなのだ。

大きな講演や海外講演ツアーは何年も前から決まるが、時間が許すかぎり、町のホールや大学での小さな講演が、タイトなスケジュールの隙間にぎっしり詰め込まれていく。さらに、９月 11 日のテロの後、１年の間に彼は数百ものインタビューを受けている。「チョムスキー効果」と呼ばれる現象があることも知った。彼の講演に参加した人たちは、自分が長い間、心に抱いていたけれど口にできなかった懸念について彼が語るのを聞いて、励まされる。

チョムスキーは何年も前に、自分の役割を意識的に選択したに違いない。世界をほんとうに変えようとする人たちに、事実と分析を、自分の口で、直接、伝えていこうと。それは、政治的な変革は地域コミュニティを基盤とする大衆社会のレベルで実現されるという、彼の信念の具現化である。

語ることが、チョムスキー自身にも驚くべき効果をもたらすという事実を、僕たちは目撃した。2002 年３月、サンフランシスコ周辺で過ごした、きわめて多忙な週だった。

彼はカリフォルニア大学バークレー校から、言語学のレクチャーを２回行なうために招かれていた。だから彼は大学で、周辺の大学の言語学の学生や教授たちとの面談や会合を重ねた。そして「自由時間」を利用して、５日間で５回の講演を行なったのである（僕たちはそのうちの３回を撮影した）。聴衆は合わせて 5000 人にのぼった。

金曜日にパロアルトで最後の講演が行なわれる頃には、彼は疲れ切り、声はかすれていた。しかしホテルの会場で 1000 人の熱心な人々を前に語り始めると、とたんにエネルギーを回復した。そして、宇宙の軍備化に関する長い話から始まった講演は、夜が更けるまで続いた。彼の講演では、最後に行なわれる質疑応答がそのまま 10 分前後のミニ講演となることが珍しくない。

講演が終了した後も、なかなかそばを離れようとしないグループからの質問に忍耐強く答えながら、チョムスキーはさらに 45 分を過ごした。サインを書き過ぎて指がひきつり、「もう書けないよ」と本人が笑うほどだった。チョムスキーは疲れ知らずではあるが、けっして鉄人ではない。しかしその彼は、会場を出るときにもまだ話していた。最近、訪れたトルコのクルド民族地域で励まされたことを、友人に語っていたのだ。

制作期間中、この映画の仮タイトルは『Chomsky Talks－－チョムスキーは語る』だった。僕たちはその控えめな感じと単純さを気に入っていた。どちらも、チョムスキーを特徴づける性質である。

彼の運動は語ることだ。自他ともに認めるように、彼は語るだけである。後の判断は聴衆の手に委ねられている。私たちは、この映画もそういう映画にしたかった。ナレーションはつけない。ただチョムスキーが自分の考えを語り、問いを投げかけるだけ。答えは、大衆と政治的な舞台が決めることである。

この映画のなかでチョムスキーは、僕たちが直視すべき問題を提示している。そして、僕たちの当初の心配に反してこの映画は、彼の機知や、温かさや、ゆるぎない信念とともに、チョムスキーその人をも描き出すことができたと思っている。

（ジャン・ユンカーマン　2002 年夏）

【監督プロフィール】

ジャン・ユンカーマン（John Junkerman）

1952 年　アメリカ合衆国ウィスコンシン州に生まれる
1969 年　慶応大学付属志木高校に留学
1974 年　スタンフォード大学東洋文学語学科卒業
1980 年　ウィスコンシン大学労使関係学科大学院卒業

主な作品
■“The Mississippi: River of Song”（スミソニアン研究所、カジマ・ビジョン共同制作　ミシシッピ川流域の現代音楽を紹介するドキュメンタリー映画シリーズ・１９９３～１９９９年）制作・監督。
　１９９９年１～３月にかけ、全米のＰＢＳ（公共放送）系テレビ局で放映。日本語版『歌うアメリカ』（解説ピーター・バラカン）も制作。

■“I’ll Be Coming Around”（フォークロック・グループ The Bottle Rocks の音楽ビデオ・１９９６年）監督

■『夢窓～庭との語らい』（英語題名“Dream Window”）（米国スミソニアン研究所制作、日本庭園の映画・１９９２年）を監督。ＮＨＫ教育テレビとアメリカＰＢＳ系テレビ局で放映。同作品は１９９３年の米国エミー賞（テレビに与えられる最高の賞）などを受賞。

■『Mr.ベースボール』（ユニバーサル映画・１９９２年）の原作執筆。
　トム・セレック主演。米国、日本をはじめ世界各地で上映。

■『日本の伝統的産業工芸作品全集』（ダイヤモンド社刊・１９９１年）監督
　英語版も監督。同作品（全八本のビデオ映画）は、豪華写真集とセットで販売され、各地の図書館などにも寄贈された。

■『老人と海』（シグロ制作・１９９０年）監督。
　沖縄与那国島でカジキ漁をする８２歳の老人の姿を描いたドキュメンタリー映画。全国映画館で一般公開。その後、ＮＨＫで放映。英語版“Uminchu”も制作・監督。

■『劫火』（自主制作・１９８６年）制作・監督。
　「原爆画家」として世界的に知られる丸木位里・俊夫妻を描いたドキュメンタリー映画。同作品の英語版“Hellfire”は１９８８年度アカデミー賞ドキュメンタリー部門にノミネート。サンフランシスコ映画祭金賞その他を受賞。

その他
■中央公論『拝啓 マッカーサー元帥様』（袖井林二郎著）英訳
■講談社『英語で答える！外国人の困った質問』（２０００年）松本薫と共著
■講談社『日常会話なのに辞書にのっていない英語の本』（１９９８年）松本薫と共著
■岩波書店『私たちは敵だったのか』（袖井林二郎著）英訳
■講談社『ちょっとした話し方　アメリカ口語』（１９９３年）松本薫と共著、のちに文庫化。
■講談社インターナショナル刊“The Hiroshima Murals:The Artof Iri Maruki and Toshi Maruki”（丸木夫妻の画集）の編集と英訳
■講談社インターナショナル刊“Encyclopedia of Japan”（日本に関する英語版百科事典）編集
■ハーバード・ビジネススクール（ハーバード大大学院）研究誌“Harvard Business School Division of Research”の調査と編集（１９８３～１９８８年）

【製作プロフィール】

山上徹二郎　（やまがみ てつじろう）

（映画プロデューサー、株式会社シグロ代表取締役）

1954年熊本県生まれ。’81年青林舎入社、映画製作をはじめる。’86年独立しシグロを設立、代表となる。「人間の街－大阪・被差別部落」（’86年　監督／小池征人）、「老人と海」（’90年　監督／ジャン・ユンカーマン）、「しがらきから吹いてくる風」（’90年　監督／西山正啓）、「あらかわ」（’93年　監督／萩原吉弘）、「鯨捕りの海」（’98年　監督／梅川俊明）、「まひるのほし」（’98年　監督／佐藤真）、「花子」（’01年　監督／佐藤真）など30本以上の記録映画を自主製作・自主配給する。’92年には劇映画「橋のない川」（監督／東陽一、製作／ガレリア・西友）の製作を手掛け、毎日映画コンクール、日本映画優秀賞・監督賞・撮影賞・美術賞他、数多くの賞を受賞。’96年、劇映画「絵の中のぼくの村」（監督／東陽一）を企画・製作。同作品で藤本賞特別賞を受賞、第46回ベルリン国際映画祭銀熊賞、第23回ゲント・フランダース国際映画祭グランプリ、アミアン国際映画祭グランプリ他、世界中で20以上の賞を受賞する。また、’93年「ＪＡＫＵＰＡ」では製作とともに監督をつとめ、第50回ベルリン国際映画祭正式招待作品「ボクの、おじさん」（2000年　監督／東陽一）では原案も手掛けた。最新作は、’01年に企画・製作した「ハッシュ！」（監督／橋口亮輔）、同作は２００１年度のカンヌ国際映画祭監督週間正式招待となり、日本国内でもロングランとなった。

【スタッフ】

企画・製作＝山上徹二郎
監督＝ジャン・ユンカーマン
撮影＝大津幸四郎
整音＝弦巻裕
編集＝ジャン・ユンカーマン、秦岳志
アソシエイト・プロデューサー＝小川真由

撮影応援＝吾妻常男、スコット・クロフォード、ジャン・ユンカーマン
現場録音＝スティーブ・ボアス、タミー・ダグラス、平岡純、小川真由
製作応援＝キャスリーン・オコネル　通訳＝クリストファー・フィールド

翻訳＝松本薫、ジャン・ユンカーマン
スチール＝テオ・ペレティエ
宣伝美術＝宮川隆
ポスト・プロダクション・コーディネーター＝ヴァレリ・ディヴェル
製作事務局＝石田優子
プロダクション・マネージャー＝佐々木正明

音楽＝忌野清志郎
「ギビツミ」忌野清志郎／リトル・スクリーミング・レビュー、『Rainbow Cafe』より「クラス」
忌野清志郎／ラフィータフィー、『秋の十字架』より「あふれる熱い涙」忌野清志郎／RC Succession、『Baby a Go Go』より

タイトル＝道川プロダクション
録音スタジオ＝ユルタ
現像所＝L.T.C.／ SCANLAB（フランス）

協力＝リトル・モア、ベイビィズ、テレシスインターショナル、日本ヘラルド映画、東映化学、日本シネアーツ、Mulberry Studio、多々良陽子、柴田敦子、家本清美、鶴見俊輔、Anthony Arnove

撮影協力＝Bev Stohl、Linda Hoaglund、Genene Salman、Students for Justice in Palestine、Barbara Lubin、Penny Rosenwasser、Middle East Children's Alliance、Paul George、Peninsula Peace and Justice Center、Omar Antar、AECOM Muslim Students Association、Wasa Bishara、Committee for Azmi Bishara and the Minorities in Israel

特別協力＝ノーム・チョムスキー、キャロル・チョムスキー